



ほつとするね  
緑の府中

# 指導室だより

第 74 号

編集・発行 府中市教育委員会教育部指導室

〒183-8703 府中市宮西町2-24

電話 042-335-4063



〓年頭所感〓

## 物言う背中

府中市教育委員会

委員 北島章雄

言葉は意思の疎通を図る最大  
の手段である。音声によって意  
思を伝達するのは動物一般に見  
られることだが、言葉による意  
思の伝達は人間の特色の一つで  
はないだろうか。我々も有史以  
来から言葉を持っていた。時に  
外国から文字を輸入し咀嚼して  
世界でも美しいとされる日本語  
を作り上げてきたのである。そ  
の日本語がアヤシイ（崩れてい  
る・危機に瀕している）と言わ  
れて久しい。最近、書店を覗く  
と日本語に関する書籍が多いよ  
うに感じられる。読みやすくし  
た古典や名文句集、話し方の技  
術、漢字クイズ、敬語の正しい  
使い方など数え切れないほど見  
受けられる。これはある面から  
見ると日本語に対する関心の高  
さとも考えられる。

「文は人なり」とはよく言われ  
るが、言葉の使い方によって  
その人の人間性と品性をうかが  
い知ることができる。日本語、

特に敬語を日常生活の中で正確  
に使うのは確かに難しい。しか  
し、日本語は千数百年の昔から  
存在していたし使われてきてい  
る。その間、敬語は時代ととも  
に発達し現代に至ったものでは  
ある。そしてその大部分は毎日  
の生活の中で無意識のうちに学び  
使われてきたのである。それが  
わが国の文化の一面を形作り、  
人間関係を円滑にし、ひいては  
社会生活の潤滑油としてその機  
能を果たすようになってきたの  
である。

このようにして言葉は現在の  
社会生活を営む上で必要不可欠  
な存在となったのである。が、  
限界もあるのではないだろうか。  
言葉がしっかりしていれば社会  
生活（家庭生活）はうまくいく  
かというところが。最近の  
えない面もあがる。最近の  
テレビ・新聞の報道を見ると、  
なんと悲しくやりきれない内容  
そして凶悪な事件が多いのだろ

うか。読む気がなくても飛び込  
んでくる。これらのことは全て  
言葉遣いに起因する等というつ  
もりは毛頭ない。が、源泉をた  
どれば一因となっているのでは  
ないだろうか。

一方で言葉では果たされない  
面もある。竹内一郎氏の近著に  
よると「言葉による情報の伝達  
は七パーセントに過ぎなく、他  
の多くは、言葉以外の情報の伝  
達、つまり顔の表情・声の質  
（高低）、大きさ、テンポ等に  
よるものであって、それに身だ  
しなみや仕草もおおきく影響さ  
れる」と紹介されている。この  
ように言葉による意思伝達には  
限界があり、全てを教えること  
はできない。それではどのよう  
にすれば教えることができるの  
だろうか。言葉に加えて右のよ  
うな方法（言葉以外の方法）を  
用い、全身全霊で教えていくこ  
とである。物言わぬ言葉とでも  
言うのだろうか、表情、雰囲気

そして率先して行う行動によっ  
て教えたものである。それが  
師（親）の背中である。

その昔会津藩の子弟教育の掟  
に「ならぬことはならぬもので  
す」というのがあった。今風に  
言えば「ダメなものはダメであ  
る」ということで、これは理屈  
抜きである。人を殺してはいけ  
ないとか、他人の物を盗んでは  
いけないということは論理的説  
明以前の問題である。言葉では  
説明されない多くは家庭教育に  
期するところでもある。しかし  
現代は社会生活が複雑化し、テ  
ンポの速さや、核家族化から家  
庭における親子の意思の疎通は  
年々少なくなっているように思  
われる。一家団欒の場と時間は  
少なくなり、目覚めから就寝ま  
で、ともすると父親とは顔を合  
わせないとすることも珍しくな  
いのではないか。その結果もの  
言わぬ教育が失われている。そ  
れに対して学校における先生と  
の交流は始業前から部活の終わ  
りまでを含めると、家庭のそれ  
に倍するであろう。結果として  
その任務が学校に求められるの  
である。言い換えれば親代わり  
である。これは非常に重たい責  
務である。教育者は是非とも子  
どもたちが憧れる「背中」を見  
せたいものである。



# オンリーワンの

## 学校を目指して

府中市立府中第八中学校

校長 渡部

博

年から青少対第八地区委員会が中心となって「緊急避難の家」が府中市の協力の下、創設された。現在は校区内におよそ170軒の協力家庭を確保している。

### 【今後に期待すること】

3年間で学んだことを、これからの人生の中で生かせるような存在になってほしいということを願っている。中学生といえども、地域にとっては頼もしい存在である。ことに、防災に関しては幼い子やお年寄りにとっては大変な力となりうる。

具体的には、避難の誘導や救護・介助あるいは、避難所の設営にと多方面での活動も可能である。

そして何よりも、活動する中学生の存在自体が緊急時における明るい希望の光となるはずである。

地域の安全や発展に貢献でき、いつまでも地域を大切にできる人材を防犯・防災教育を切り口に育成することこそ、本校の目指すところである。

### 【自然が残る地域】

府中市の南西に位置する本校は、清流多摩川のほとりに位置している。学校の周辺には近年珍しくなった水田が至るところにあり、本原稿を執筆している今は刈り取りが終わり、たわわに実った稲穂が天日干しされている。もう少し経つと、軒先に渋柿がすだれのように干されるという、一昔前の何か懐かしい風景に出会える地域にある。

### 【防犯・防災の取り組み】

開校36年目を迎える市内ではまだまだ校歴の浅い学校ではあるが、「府中市学校教育プラン21」の具現に向けて、「防犯・防災教育」に取り組んでいる。市内の他の中学校区に先駆けて、平成10年7月に青少対第八地区委員会が中心となって「緊急避難の家」を創設したことに

よって、防犯・防災教育の拠点校として今日まで活動を継続している。特に、地域合同防災訓練では府中消防署分梅出張所、消防団第16分団及び青少対第八地区委員会並びに府中市女性防火の会会員の協力の下、本校二年生、保護者と地域住民が参加して訓練を行っている。

この取り組みは、3年間の教育課程内に位置づけている。一年生では「立川防災館」にての学習、三年生では「地域安全マップ」作りを実施している。

### 【本校の取り組みの状況】

平成16・17年度の2年間、「地域とともに取り組む学校防災・防犯教育」を研究主題とした府中市の研究協力校を受け、研究を進めた。さらに、平成19・20年度は東京都教育委員会が所管する「安全プログラム開発事業推進校」として、主に防災教育

の研究を推進してきた。

① 毎月の避難訓練では、火災発生・地震発生・不審者侵入を想定して実施している。想定できるさまざまな状況の下で行っているが、生徒たちに緊張感を持たせて実践させるために、避難開始の放送から最終人員点呼完了までの所要時間を3分間に設定して取り組んでいる。

② 地域連携の取り組みでは、教育課程内に「地域合同防災訓練」を設定している。保護者や地域住民の参加を目的に、土曜日の学校公開日に実施している。これは現在、二年生で行っている。

消防訓練、応急処置、煙体験、起震車体験等8項目にわたる訓練を消防署員や消防団員及び府中市女性防火の会会員の協力により、二年生全員とその保護者及び地域住民が参加して行っている。

③ 防犯教育については、平成10

生徒たちは9月1日の「防災の日」に居住区内の「緊急避難の家」に分担して挨拶回りをしている。また、三年生は日頃から登下校時に通学路やその周辺で危険箇所を点検し、年度末に「地域安全マップ」を作成し、全校に注意喚起している。

また、昨年度末には、四谷小学校六年生全員を本校に招き、本校武道場で卒業間際の中学三年生がブース形式で自分たちが調べ上げた「地域の危険箇所」についての報告会を開催した。

④ 3年間を通して取り組んでいる本校の「防犯・防災教育」は、昨年度末、「阪神淡路大震災」を契機に創設された兵庫県及び毎日新聞大阪本社が主催する「防災甲子園」に参加し、高く評価され賞をいただいた。この



広域避難場所



東京都府中市 市制施行55周年記念 国府ふるさと  
**第二回 こくふロマン交流祭**  
 2009 in 府中

府中市・府中市教育委員会・

こくふロマン交流祭2009 in

n府中実行委員会主催による第

一回「国府サミット・シンポジ

ウム」が、平成21年10月24日(土)

にルミエール府中コンベンショ

ンホール飛鳥で開催された。

当日は、全国約68か所の「国

府」所在地自治体から、17の参

加があった。シンポジウムでは、

野口忠直府中市長より主催者款

迎の挨拶の後、「小学生手づくり

新聞コンクール&中学生作文コ

ンクール」の表彰式が行われ、

次の小・中学生が入賞された。

○手づくり新聞コンクールの部

最優秀賞 「武蔵国新聞」

府中第二小学校 六年 北澤修一郎



手づくり新聞

優秀賞 「国府の中新聞」

若松小学校 六年 尾崎 七海

佳作 「武蔵国新聞」

小柳小学校 六年 川崎 瞭

○作文コンクールの部

最優秀賞「私たちの町武蔵国府」

浅間中学校 一年 福田 真由

優秀賞「未来へのメッセージ」

都立武蔵高等学校

附属中学校 二年 朝倉由香子

佳作「歴史と文化のまち府中」

府中第一中学校 二年 松山 歩実

特別賞「歴史と緑の町 府中」

府中第一中学校 二年 片山 知志

最優秀賞作文

「私たちの町 武蔵国府」

浅間中学校 一年 福田 真由

「ムサシノキスゲがほのかに香

る5月。私は府中が生み出す自

然の恵みとともに、遠い歴史の

旅に出た——。

この町は、数多くの歴史がね

むる土地である。そんな豊かな

府中の町は昔、どのような姿を

していたのだろうか……。1分

1秒流れるごとに、私たちの住

んでいるこの府中も、また大き

な変化をとげてきたのだ。その

時代をさかのぼり、今から13

00年前、武蔵国の国府がおか

れた府中の様子はどのようなも



手づくり新聞の表彰

のだったが、さぐってみることにした。

そもそも、国府とは地方をお

さめるためにおかれた役所であ

った。ここ、武蔵国の国府でも

多様な人たちが集う場であっ

た。もちろん、人口が多いだけ

あって、広大な面積もほこって

いた。そして、このマチ最大の

特徴は庶民の家屋や各種の工房

として使われた多くの竪穴住居

の存在である。これは、品物の

生産者や、国の警備をする兵士

などが利用したのだろうと考え

られる。そして、この大きな国

府をつくるために、大規模な工

事が行われた。武蔵国の国府が

完成するまでに、20年近くか

かったという。

また、この国府からの出土土

器も数多くある。武蔵台遺跡で

最も古い時期の土器群や、大丸

地区遺跡出土の軒丸瓦など、今

でもありのままの姿で出土して

いるものも多い。軒丸瓦は花を

かたどったもので、どれも花弁

は6〜15枚ついていることがわ

かる。この瓦以外にも、軒平瓦

や人名瓦、郷名瓦などがあり、

鬼の顔の形をしている瓦もある。

人名瓦に記されている人物は、

比較的、身分の高い人であった

ことがわかる。

さらに、この武蔵国で生産さ

れたものが、平城京に送られて

いたことも確認されている。そ

の平城京で出土した荷札に、

「武蔵国から送られてきた品」

という内容が書かれている。こ

のことから、武蔵国の国府は、

平城京と交流があったことがわ

かる。また、この国府の国庁の

建物は、現在の大國魂神社周辺

にあったと考えられている。私

たちの身近なところでも、こう

して数多く遺跡や土器が発掘さ

れている。

このように武蔵国は今でも私

たちの町となって存在している。

また、人間一人一人に人生があるように、一つ一つの土器や遺跡にもエピソードがある。これからも、府中の重要な文化財としても大きな役割を果たすであろう。私たちの町である、この府中の歴史を、多くの人に肌と心で感じてほしい。そのために私はもっと府中の歴史を深くさぐっていききたい。武蔵国の歴史は、私たちの誇りでもあるから。」

表彰式のあと、記念講演、国府シンポジウムが行われ、最後の国府サミット共同宣言で、こくふロマン交流祭は、閉会した。



国府シンポジウムで熱心に耳を傾ける参加者



国府サミット共同宣言(野口忠直府中市長)

府中市教育委員会研究協力校研究発表報告

すすんで運動に取り組む

児童の育成

～体づくり運動領域における

ワークショップ型授業を通して～

府中市立府中第四小学校 研究主任 鈴木 輝

研究の経過

本校は、平成19年度に府中市教育委員会研究推進校として体育科の研究を始めた。研究を始めるにあたり、児童の実態調査を行い、その結果から

- ・めあてをもって意欲的に取り組んでほしい
- ・運動の楽しさを感じてほしい
- ・児童相互でアドバイスし合い、協力して学習してほしい

という3点を教師の願いとしてまとめた。そして、児童の実態や教師の願い、本校教育目標から研究主題を「すすんで運動に取り組む児童の育成」に設定し、研究を進めてきた。

平成20年度からは、研究協力校として研究を深め、同じ主題のもと領域を体づくり運動にし

- ・学習過程の工夫
- ・提示する運動の工夫
- ・場の設定の工夫
- ・学習資料の工夫



仲よし学級 授業風景

の4点の手だてにより児童は運動する楽しさを味わい、すすんで運動に取り組むようになる。この仮説をもとに実践を重ねた。そして、今年度は、特に学習過程の工夫に焦点を絞り研究を深めてきた。

ワークショップ型授業

本校では、学習過程の工夫にあたり、東京学芸大学教授 細江文利先生を講師にお招きし、研究を進めた。そして、単元を

〈提示〉〈工夫〉〈共有〉という3段階のステージに分けて学習を進めることとした。

まず、第1ステージは、『提示』の時間で、様々な運動を経験させ、第2ステージにつながる『もと

になる動き』を提示する時間である。動きの中から『もとなる動き』の工夫のポイントを学び、第2ステージへの意欲へとつなげていく。

続いて第2ステージは、『工夫』の時間で、第1ステージの『もとなる動き』を児童がグループごとに工夫する時間である。このステージは、運動をしながら、よりおもしろい動きになるよう、『もとなる動き』に工夫を加えていく。

第3ステージは、『共有』の時間で、友達が工夫した動きに取り組み、自分たちが考えた動きとの違いや、おもしろさを味わう。

そして指導者は、ねらいを明確にし、ステージにあった支援をしていくこととした。この3段階のステージを柱とした学習形態を府中第四小学校のワークショップ型授業として、実践を通して研究を深めてきた。

研究発表

研究発表当日は、学年閉鎖の学年をのぞいて、全ての学年で第3ステージ(仲よし学級は第2ステージ)の授業を行い、ワークショップ型授業で学習をしてきた児童の様子を見ていただいた。

発表会では、低学年・中学年・高学年・仲よし学級の4分科会に分かれて実践報告を行い、その後協議の時間を確保した。協議では、参会者の方々から多くのご意見をいただき、より研究を深めることができた。時間の都合上、長い時間がとれなかったが、大変有意義な時間となった。

講演会では、年間講師である細江文利先生から「活用力の育成とワークショップ型授業」という演題でお話をいただき、習得、活用、探求の学びのサイクルの重要性和、ワークショップ型授業をすることで身に付く活用力の大切さを、改めて考えることができた。

成果と課題

○成果

《運動》では、多様な動きを多く経験させたり、適切なめあてをしっかりとめさせたりしたことが、動きの正確さや動きのばばを広げる結果となった。

《態度》では、提示する動きを、実態をふまえて、焦点化するこ

とで、めあてをつかんで楽しく運動する姿が見られた。《学び方》では、児童自らが動きを考えるよう、学習過程を工夫したことで、友達の動きを意識しながら意欲的に取り組むことができた。

○課題

休み時間に、学習したことを取り入れて、遊んでいる様子が見られるようになったが、より一層日常的に取り組ませるようしていきたい。

学習の中で、児童の意欲を生かしながら、よりねらいにあった支援をしていけるよう教材研究を深め、指導計画の充実も図っていきたい。



講演 細江文利先生



府中市教育委員会研究協力校研究発表報告

伝え合おう

自分の思いを

自分の言葉で

府中市立武蔵台小学校

研究主任 石井恵子

10月23日、本校は平成20・21年度府中市教育委員会研究協力校としての二年間の研究成果を発表した。英語活動で培ったコミュニケーション力を生かし、豊かな言葉の通い合いの溢れる学校を目指したいと考え、研究領域を国語科の「話すこと・聞くこと」に絞った。中でも「話し合い」に焦点を当て、子どもたち一人一人に自信を持たせ、自分の思いの伝え方を学ばせたいと考えた。

限らず、他教科や領域、日常生活においても常に意識し、実践に取り組んできた。

研究の重点

①武蔵台モデルの設定

全学年共通の単元作りの考えに立ち、学習形態の工夫を行った。伝え合いの学習においては、何よりも「伝えたい。」という思いが子ども自身にあることが前提となるため、まず課題把握・情報収集といった一人学びの段階を重視する。この時間や方法を確保し、子どもたちは自分の思いをはっきりとした考えや意見へと整理することができる。

次は、学び合いの段階である。話し合いを通して、伝えたいことを自分の言葉で話すことを目指す。相互交流を通し、相互理解が生まれ、考えの深まりも期待される。

低学年は『相手の言葉を受け止めて、話題に沿って話し合う子ども』、中学年は『互いの考えを認めながら話し合う子ども』、高学年は『自分の立場や意図を明確にして話し合う子ども』とし、人との関わりを通して、自分の考えを主体的に伝える子どもたちを育てるための研究を進めた。そして、国語科に

そして、再び一人学びの段階になる。学び合いを経て自分の



武蔵台モデル…パネルディスカッションでフロアからの意見発表中

考えの変容を振り返り、新たな考えにまとめる時間である。この学習過程を通し、自己確立・自己表現をも目指している。

②見える化グッズ

武蔵台モデルを進めるための手立てとして考えた。子どもたちにとって、話し合いを分かりやすく見えるように工夫したものである。以下がその例である。

学習シート 学習の見直しをもち、意欲的に話し合いを進める。道具の活用 授業の盛り上げに効果的、話し合いを残すために付箋紙などを活用する。手引きや掲示物 話し合い方を学ぶために用意した。

③言語環境作り

「基礎・基本の時間」の活用 毎週金曜日の朝15分間、全校で言葉遊び、音読、群読等に挑

戦している。人に伝える時の声をもつ力は重要である。

「ことばの宝箱」の実践

廊下や掲示板に、子どもたちの作品を学年毎に掲示している。詩や俳句、言葉遊び、漢字調べ等に取り組み、感想箱で学び合いや交流も図っている。

授業における話し合い活動

本研究では、「対話から話し合いへ」という話し合いの過程を大切にしている。低学年では話し合いの基本形態である対話を重視した。中学年では対話から、少人数での話し合いを授業に多く取り入れた。高学年では、少人数の話し合いに加えて、全体での話し合いや討論会を行い、学習の積み重ねを心がけた。

評価の工夫

話し合いの評価は大変難しい。そこで、目指す姿を具体的に示し、子ども自らが行う自己評価や相互評価をするときの基準を定めた。また、どのような話し合い・発表をするのか、授業の始めに、子どもたちに具体的に伝え、活動の見直しを明確に持たせた。このことが、子どもたち自身に評価意識を持たせ、よりねらいに迫る学習活動を進めることにつながった。

更に、指導案に評価基準「A」の姿を明示することで、

指導者がより高い目標への支援を意識し、授業を進めることができた。

成果と課題

成果としては、武蔵台モデルによる学習形態の工夫、及び見える化グッズの効果も挙げられる。加えて日常の言語環境を整ったため、子どもの「話す・聞く・話し合う」意識と技能向上が図れた。

課題は、他教科・領域での言語力育成、及び話し合いの適切な評価と個に応じた学習活動の工夫を更に進めることである。人と人とのコミュニケーションが大切な時代だからこそ、豊かな人間関係を育み、伝え合う力を育てる研究は大切だと考える。本研究を踏まえ、更に豊かな教育活動を進めていきたい。



見える化グッズ…手作りマイクを使って楽しく対話中

府中市教育委員会研究協力校

研究発表会案内(3学期)

- ◆府中第四中学校 1月22日
  - 研究主題「地域と連携を図りICTを活用した授業の工夫」
  - 講演「授業デザインの新事情とこれからの展望」 武蔵大学社会学部準教授 中橋雄氏
- ◆府中第三中学校 1月26日
  - 研究主題「生徒の主体的な学びを高めるための授業づくり」
  - 講演「夢への挑戦」 鈴木徹氏
- ◆南白糸台小学校 1月29日
  - 研究主題「読む・書く・思いえがく」
  - 講演「子どもの本の周辺」 岩崎京子氏
- ◆府中第二中学校 2月5日
  - 研究主題「連携を通じた『学力』の向上」
  - 講演「特別支援教育の視点に基づく指導の工夫」 東京家政大学準教授 半澤嘉博氏
- ◆府中第九小学校 2月9日
  - 研究主題「ことば」力を高める
  - 講演「多様化する社会に求められる言語力」 日本教育大学院大学客員教授 北川達夫氏
- ◆道徳授業地区公開講座(1月)
  - ◆1月21日(木)
    - ☆小柳小学校 8時50分
    - ◆1月23日(土)
      - ☆府中第九小学校 8時45分
- ◆府中研究発表会 2月3日
  - 講演「アフリカの食と異文化」
  - ジャーナリスト 松本仁一氏

1月研修会・委員会等予定	日	曜	研修会・委員会等	会場	研修内容等
	7	木	進路指導主任会	教育センター	全体会
	7	木	小学校英語活動推進委員会	教育センター	全体会(報告書原稿検討)
	8	金	校内研修担当者研修	教育センター	講義等
	14	木	進路指導主任会	教育センター	全体会
	14	木	第5回就学指導協議会	教育センター	A・B分科会
	15	金	体力向上委員会	教育センター	全体会
	18	月	生活指導主任会	教育センター	全体会(連絡、検討事項)小・中分科会
	25	月	特別支援学級代表者会、担任研修会	調布特別支援学校	合同研修会「教室環境の設定について」
	25	月	ICT活用推進委員会	教育センター	全体会、分科会
	28	木	教務主任会	教育センター	全体会、分科会

学びの窓

地域防災スクール事業について

府中消防署長 阿出川 悟  
 日本では少ない火災事例であるが、身に纏う衣服に火が着く「着衣着火」で亡くなる方の多い米国では、着衣に火が着いたとき、「Stop Drop and Roll」と言い地面に転がることを小学生が理解している。こうした教育は学校カリキュラムの中で、現役消防士たちが教える枠として実施されている。翻って日本では、我々消防の認識も薄く、あまり子どもたちに関わってこなかったように思う。

現在、「地域防災スクールモデル事業」は、市の協力を頂いて数校の小中学校で始めたところである。子どもたちに学校や消防署、消防団、市、PTA、地元自治会等の多くの人が災害や事故から身を守る術を伝えていく事業である。

試行錯誤ではあるが、様々な人が関わり、地震や放水の体験・応急救護・炊き出し・避難所運営などを通して、防災の輪を広げていく。これは我々自身にも新しい発見が大いにあった。

特に、中学生ともなれば、災害時の戦力として期待できる。今後、消防署としても本事業を

通して子どもの安全にさらに関わっていきたい。関係各位のご協力をお願いする。



「啐啄(そったく)の機」という言葉がある。「啐」は殻の中で雛がつつく音であり、「啄」は、親鳥が外から殻を破ろうとする音をさす。これは、雛が内側から殻をつつく頃合いに、母鳥が外から殻をつつく様を表しており、弟子と師の呼吸が呼応することを意味している。例えば、ヘレン・ケラー(一八八〇～一九六八)は、その著書の中で、師であり、同時に生涯の友人であったアン・サリバンの指導の方法について、「先生は、知識を伝えるのに、正しいときをとらえてなされたので、私は楽しく容易にそれを受け取るこができた」と記している。「学びたい」「教えたい」という気持ちが一一致した時、その効果は高まると言える。

**「啐啄(そったく)の機」**

先日、小学校の展覧会を見る機会があった。その中に、児童が校庭の木々を描いた作品がひととき印象に残った。樹皮の色光のあたり方、枝や葉の茂り方等に迫力があった。担当の先生からは「普段見慣れている木々でも、意識して見直すことが大切です。」と話していただいた。このことから、我々大人も子どもを「見直す」ことが必要だと感じた。子どもたちの表情は、様々なことを語っている。初任者教員の授業を見る機会が多いが、もっと子どもの顔や目を見ながら授業をしてほしいと指導することがある。毎日子どもたちと顔を合わせてはいるが、実はその表情を見過ごしている、いわば殻の中の音を聞き逃している時があるのではないか。「機」をつかむことは、そこから始まると言える。教員と子どもたちの息の合った授業は、雰囲気や穏やかであり、それでいて力強い。もちろんそこには、先生方の努力の積み重ねがあると言えよう。

今年、そのような授業を多く見られることを期待している。  
 (指導主事 乙幡 英剛)